

# 女庭訓往来を読む(1) 解答

史料「女庭訓往来倭文鑑」睦月(往信)

〔奥貫家文書No.3271〕

## 【釈文】

年の始とし はじめの御悦事おんよろこびこと旧候ふるきへ共、

尽つぎせぬ目出めでたさにて候、先元まづくわん

三さんの初子日はつねのひめづらしく珍敷わかとの、若殿わかとのばらにハ庭

に小松こまつを引植ひきうゑ、栄さかゆ行く千代ちよ

の肇はじめの寿ことほぎを、倭漢やまとものろこしの言ことの

葉はに連つらね、姫君達ひめきみたちハひなあそび雛遊ひなあそびに

心こゝろい入れて、三尺さんさくの御厨子みづしの柵たな

二基ふたよろひより、何なにくれと取出とらで給たまふ、

殿作とのづくり所狭ところせき迄まで爪探まさぐりつゝ、

永ながき比ころの日も暮くるるを惜をしげに

見みえて候、此頃このころに又また若わかき女房にようばう

共ども、稚木わかきの梅うめの盛さかりなる、並なみ、

木きの花はなを賭かけものにして、楊弓やうきう

をと催もよほし候、されども御目めに

懸かけ候ハすは、栄はえなき御事ことに

思おもひ浮漂ゆたひ候俟まち、其方そのかたに心入こゝろいれ

たる若わかき女共をんなども召具めしぐせられ、

渡わたりおはしまし候ハ、待まちたて

まつり候、萬々よろづくたいめ対面たいめんの時申ときまを

述のぶへし、穴賢あなかしこ、

睦月五日 中務

侍従のおもと

申させ給へ

## 【読み下し】

年の始の御悦事旧り候へ共、尽きせぬ目出たさにて候、先元三の初子日珍しく、若殿原は庭に小松を引き植え、栄え行く千代のはじめの寿を、大和・唐土の言の葉に連ね、姫君達は雛遊びに心入れて、三尺の御厨子の柵二基より、何くれと取り出給う、殿作り所狭きまで爪探ぐりつつ、永き頃の日も暮るるを惜げに見えて候、此頃また若き女房共、稚木の梅の盛りなる、並木の花を賭物にして、楊弓をと催し候、されども御目に懸け候はずは、栄なき御事に思い揺蕩い候まま、其方に心入れたる若き女共召し具せられ、渡りおはしまし候はば待ちたてまつり候、萬々対面の時申し述べし、穴賢、

睦月五日 中務

侍従のおもと

申させ給へ

【欄外 釈文】

女庭訓絵抄 をんなていきんのゑとぎ

庭訓の二字ハ論語季氏 にじ ろんごきし

の篇に孔夫子御子の伯魚 へん こうふうし こ はくぎよ

庭を過給ふとき、詩と礼との にハ すぎ こと まな

事を学ぶべしとをしへ給へる こと まな

御詞より出て父の子に訓ふる ごことへ いで ちい こ をし

ことを庭訓といふ○世に玄恵 にハのをしへ こと

法印の作れる庭訓往来と ほふいん つく ていきんわうらい

いふ書あり、それにならひて ふみ

婦女のをしへとなることを述 をなご のべ

たれば女庭訓といふ○此ふミ をんなていきん

何人の作れるにかいまだ なにひと つく

考へず かんが

年の始 とし はじめ

古今

新らしきとしのはしめに あた かくし

こそ 千歳をかねて ちとせ 楽しきをつめ たの

子の日 ね ひ

夫木

今年生の松を ことしおひ まつ 手に引そへて て ひき

けふよりのちの ちよ 千代をかそへん

頭仲

拾芥抄に日正月子日丘 しふかいしょう にちせいげつこひのひをか

のぼりて四方を望見れば よも のぞみ

よき氣をうけて百病を き やまひ

のぞきわづらひなしとミゆ、 まつ

松をひくことハ若菜の如く わか菜

食すべき為なりといふ説 しよく ため

あれど歌にハ只引植て うた たいひきうゑ

千代をことぶくよしにのミ ちよ

よめり、先ハおほくよミ来た まつ

れる歌のむねにしたがひ うた

て害なし、 がい 雛遊子 ひなあそび

日のひ々な遊びのことうつ ひ

ば物語に出たり ものがたり

楊弓 やうきう

楊弓ハ唐の玄宗帝の時 やうきう とう げんそうてい

楊貴妃より始るといふ やうきひ はじめ

説あれど慥ならず、もとハ せつ たしか

楊柳の枝を弓につくりて やなぎ えだ ゆみ

もてあそびしなどや始 はじめ

ならんと貞丈先生ハ申されき、 ていじやうせんせい

睦月 むつ 正月の 和名也

む月とハ高きいやしき たか

ゆき来たるゆゑむつび月 き

といへるを略せるなり りやく

右奥儀抄 みぎおくぎしやう

また○む月といふハもとつ また

月といふこと也、もとの また

二言をつゝむればもとなる ふたごひ

もをむにうつして も

む月といへるなり むつ

右真淵万葉考下 まぶちまんでんまふかう

皆これに倣 みな